

製品名: Myt 1 (リン酸化 Ser83) ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab05061**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	IHC, ICC/IF, ELISA
反応性	ヒト、ラット、マウス
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率 IHC 1:100-1:300, ICC/IF 1:50-1:200, ELISA 1:5000-1:10000

分子量

抗原情報

遺伝子名	PKMYT1
別名	PKMYT1; MYT1; Membrane-associated tyrosine- and threonine-specific cdc2-inhibitory kinase; Myt1 kinase
遺伝子 ID	9088.0
SwissProt ID	Q99640
免疫原	抗血清は、ヒト MYT1 由来の Ser83 リン酸化部位周辺の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 49-98

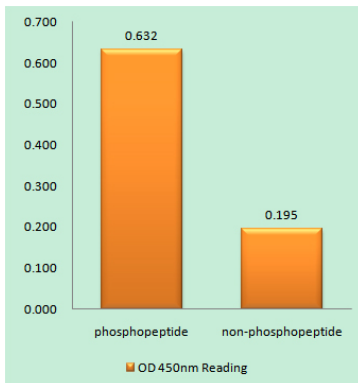
背景

この遺伝子は、セリン/スレオニンタンパク質キナーゼファミリーのメンバーをコードしています。コードされているタンパク質は膜関連キナーゼであり、サイクリン依存性キナーゼ1をリン酸化して不活性化することで、細胞周期のG2/M期遷移を負に制御します。コードされているタンパク質の活性は、ポロ様キナーゼ1によって制御されます。この遺伝子には、複数のアイソフォームをコードする選択的スプライシング転写バリエーションが観察されています。[RefSeq提供、2012年5月]、触媒活性: ATP + タンパク質 = ADP + リン酸化タンパク質。、ドメイン: 膜関連モチーフは、ゴルジ体膜への局在に必須です。一部の著者によると、これは膜貫通ドメインですが、膜貫通領域の存在は証明されていません。、酵素制御: 有糸分裂中の過剰リン酸化によって負に制御されます。過剰リン酸化型はCCNB1-CDC2複合体と会合しない。PLK1タンパク質キナーゼは有糸分裂リン酸化に必要であると考えられる。、機能: cdc2がサイクリンと複合体を形成している場合、cdc2キナーゼのリン酸化によって有糸分裂(G2期からM期への移行)開始の負の調節因子として機能する。cdc2の主に「Thr-14」のリン酸化を媒介する。ゴルジ体の断片化にも関与する。cdc2の「Tyr-15」のリン酸化にも関与している可能性があるが、チロシンキナーゼ活性は不明であり、間接的である可能性がある。眼の発達過程において、Notchシグナル伝達経路の下流標的となる可能性がある。、PTM: 自己リン酸化。CDC2-CCNB1複合体によって、未定義のセリンおよびスレオニン残基がリン酸化される。CDC2-CCNB1複合体によるリン酸化は、触媒活性を阻害する可能性がある。、配列注意: キメラcDNA。、類似性: タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属する。、類似性: タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属する。Ser/Thrタンパク質キナーゼファミリー。WEE1サブファミリー。、類似性: 1つのタンパク質キナーゼドメインを含む。、サブユニット: CDC2-CCNB1複合体と相互作用する。CDC2-CCNB1によってリン酸化されると、PIN1とも相互作用する。、

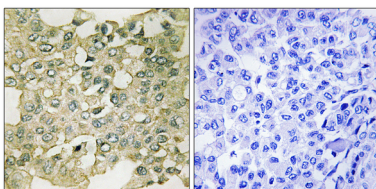
研究分野

Cell_Cycle_G1S;Cell_Cycle_G2M_DNA;卵母細胞減数分裂;プロゲステロンによる卵母細胞成熟;

画像データ



MYT1 (リン酸化Ser83) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定法 (リン酸化 ELISA)



MYT1 (リン酸化Ser83) 抗体を用いたパラフィン包埋ヒト乳癌の免疫組織化学染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした状態。